

育てるニシン100万尾放流 鯨よ群来ろ

阿部 規さん

留萌支庁留萌南部地区水産技術普及指導所



左から河井さん、水野さん、阿部さん

やる気の出る浜をつくらうぜ

まくり汁
昔ながらのニシン漁場独特の料理で「まくり汁」がある。今は俗にいう三平汁といわれている。

北海道では日本海地域の漁業振興を図るため、日本海沿岸性鯨資源増大プロジェクトを設置し、平成8年から事業をスタートさせています。この事業は種苗放流による資源増大部会、産卵場造成部会、資源管理策部会の3部会からなり、北海道水産林務部、水産試験場、支庁水産課、水産技術普及指導所、北海道栽培漁業振興公社が一体となって進めています。私たち普及員は、浜の漁師さんと身近に接しており、現場の情報をいち早く得ることが出来る立場を生かして、鯨の採卵作業（成熟した親魚を使用し、受精させた卵をふ化盆に付着させ輸送容器に収容する。）栽培公社羽幌事業所であ

り、実施場所は稚内市も加わり5か所になりました。昨年、鯨刺し網漁業を行っている留萌漁業協同組合の松沢晃さんと飛鳥弦二指導漁業士から、留萌港内で採取した鯨の卵が産み付けられた流れ藻を提供してもらいましたが、産卵場は見つかりませんでした。今年には産卵場を発見することが出来ました。産卵場調査の中心となっている稚内水産試験場の研究員も喜び、今後の鯨研究の励みになっています。「2、3月に100万円の水揚げがあれば助かるんだけどね。」と早春に聞かされた言葉が実現出来るようにみんなで力を合わせて頑張っていきたい。

化させ育成した稚魚の中間育成と放流、産卵藻場（鯨は浅瀬の海藻に卵を産み付ける）の調査などを受け持っています。これらのことは普及員だけで出来ることではなく、地元の漁業協同組合と漁師さん、市役所、町役場の協力があればこそ行えることです。昨年は地元で採卵及び中間育成した鯨の稚魚（全長7センチ）、約12万尾を留萌港から放流しました。厚田村、浜益村、羽幌町でも同様に実施しており、日本海全体では約49万尾の放流をしました。今年も留萌市で20万尾の放流を計画し、中間育成場所は礼受漁港を予定しています。日本海全体では約100万尾の放流を計画してお

主な餌は動物プランクトン。産卵期は春で、北海道西岸では2月から5月に沿岸に押し寄せ、一斉に産卵と放精が行われます。雌が海藻などに卵を産み付け、雄も放精して受精します。産卵する親魚の量が多いときは、雄の精液のため海が白く濁る状態を群来（くき）と呼んでいます。鯨の体長は1歳で15センチ、2歳で22センチ、3歳で26センチと言われています。平成9年春に留萌沿岸で漁獲された鯨は2歳魚と考えられており、成熟していました。生態についてはいまだに謎の部分が多く、今後の水産試験場の研究成果が待たれます。形態は厚みが少なくスマート。下あごは上あごより長く受け口で、背びれと腹びれはほぼ同じ位置にあります。漁獲されたばかりの体の色は朝日をあびて銀色に輝き、神々しい。利用・加工成人病予防のEPAと頭の働きを良くするDHAを多く含んだ健康食品です。旬は春。鮮魚は塩焼き、煮物、三平汁、コンブ巻き、かば焼き、ぬた、マリネなど。加工品は身欠き鯨、数の子、切り込み、いずし、糠鯨、親子漬けなどがあります。

鯨ひとくちメモ

留萌の海の底、「ニシン荘」に暮らすニシンの家族にふりかかる様々な問題を、留萌高校の演劇部が、コメディタッチで演出した。

昭和32年、今年もやん衆たちが、ニシンを捕りにやってきた。そんなニシンたちを保護するため、「ニシン開発局」は、すべての外敵から守る「巨大保護シエルター」建設を計画した。取壊しを迫られる「ニシン荘」、札幌を切る「ニシン開発局」。ニシン荘はどうなる？保護シエルターは？ニシン荘の住人は？弱肉強食とは？そしてなぜニシンは捕れなくなったのか？はたまた昭和61年の商業捕鯨禁止の謎は？と、ニシンやクジラに扮した部員たちは、

役柄に合った熱演を披露してくれた。決して大きな舞台、華やかな舞台、設備が整った舞台ではなかったが、若い感覚で見た現代社会の醜い有様を、ニシンとクジラに例えて演出した。

物語のあらすじ・・・大黒柱を人間に捕獲され、残された老夫婦と嫁娘が、貧しくとも深い愛情を絆にニシン荘で暮らしている。その家族に家賃を取立てにくる家主は、口はうるさいが心はやさしい。その家族と家主に高額の現金と巧妙な手口で立ち退きを迫り、ニシンに安全なシエルター建

設を持ちかける開発局・・・快適なシエルターでの暮らしと現金を与えられたニシンたち。しかし、この筋書はクジラたちの陰謀だったのである。昭和61年に商業捕鯨禁止となる前には、クジラが乱獲され、絶滅の危機にたたされていた。クジラたちは自分たちの子孫を守るため、人間たちの目をニシンに向けさせたのである・・・ニシンの家族愛を現代社会に例え、コメディタッチで表現した一幕であった。

オオカミウオは鯨の豊漁を伝える神？！



漁師仲間では縁起の良い魚として、オオカミウオが知られている。アイヌ語で「チツブカムイ」（神の魚）と呼ばれ、オオカミウオがとれると、ニシンが豊漁になるという言い伝えがあるそうだ。留萌でも3月27日に日本海側では珍しく、カレイの刺し網にかかった。オオカミウオの体長は約1メートルほどになり、茶褐色でグロテスクな顔をしている。頭が大きく、4本から6本の犬歯で獲物を襲う。カニやエビ、貝類などを好んで食べる。

にしん荘・早春物語



留萌高校・演劇部

